

南嶽懷讓の研究

松 原 良 樹

はじめに

周知の如く、南嶽懷讓（六七七～七四四）は中国禪宗六祖慧能に嗣ぎ、馬祖道一の師として、また南嶽下の派祖として後世尊ばれる。さらに彼の系統から後の五家に数えられる瀉仰宗と臨済宗が出るのであり、南嶽懷讓は初期禪宗史において極めて重要な人物といえる。

しかしながら、南嶽はかかる地位に比して著述が乏しく、著作も伝わっていないため、その存在は極めて希薄である。一次資料に乏しいのに加え、『宗鏡錄』における南嶽の示衆が、同じ『宗鏡錄』や他の資料では馬祖の言として伝えられている。

このようなことが研究の障害と思われるが、既に宇井伯寿氏、柳田聖山氏、中川孝氏等^{〔1〕}によつて基本資料の不足を超えて極めて詳細な研究がなされている。しかし先行研究は主に南嶽が実在した上での考察であつた。そこで本稿では先学の

指摘を踏まえながら、南嶽と老安、慧能、そして馬祖との関係、及び南嶽没後の動向を中心として南嶽の実在性について考察していく。

老安・慧能・馬祖との関係

既に椎名宏雄氏によつて指摘されているが、『宝林伝』の逸文は、南嶽の老安参問について、

宝林伝、時有坦然禪師、親讓嗟歎、及命讓遊嵩山觀安禪師。問曰、汝何至此。讓曰、礼拝和尚。師曰、汝須蜜作用。讓曰、何者是蜜作用。安更不言、開眼合眼。讓於言下、豁然契悟

として、南嶽の大悟を伝える。『宝林伝』については、柳田氏の研究により、馬祖教団と密接な関係があり、従来『宝林伝』の意図が、慧能―南嶽―馬祖の不確かな三代の相承を敢えて強調するところにあつたと考えられていた。^{〔3〕}しかしながら、右の『宝林伝』の逸文の記述から考察する限り、『宝林伝』は曹溪三代を顕彰するだけでなく、老安―南嶽の関係も重

要視したという矛盾性も含まれているといえるであろう。

またこの機縁は、『祖堂集』や『景德伝灯録』等によると、老安の下で大悟したのは南嶽ではなく坦然である。いま、『祖堂集』巻三の老安章を記す次の如くである。

安国師、嗣五祖忍大師。在嵩山。坦然禪師問、如何是西来意旨。師曰、何不問自家意旨。問他意旨作什麼。進曰、如何是坦然意旨。師曰、汝須密作用。進曰、如何是密作用。師閉目又開目。坦然禪師便悟（巻三・五張）⁽⁴⁾

右に明らかなように、老安と問答をして悟るのは坦然であり、南嶽の名は見えない。また、同巻三の南嶽章においても、時有坦然禪師、觀讓嗟嘆、乃命雲遊博問光知。至嵩山安和尚処、坦然問、西来意話。坦然便悟、事安和尚（巻三・二十二張）

とあり、巻三の老安章と同様にして坦然が大悟する。このようなことを踏まえると、『宝林伝』の逸文より『祖堂集』の方が、老安との関係は南嶽より坦然の方が強いといえるであろう。『祖堂集』巻三によると、南嶽は老安とは機縁が契わず、曹溪六祖の下に赴く。その時の消息は次の如くである。

六祖問、子近離何方。対曰、離嵩山。特来礼拜和尚。祖曰、什麼物与麼来。対曰、説似一物即不中。在于左右一十二載、至景雲二年、礼辞祖師。祖師曰、説似一物即不中、還仮修証不。対曰、修証即不無、不敢汚染。祖曰、即這箇不汚染底是諸仏之所護念。汝亦如是、吾亦如是。西二十七祖般若多羅記汝、仏法従汝辺去、向後馬駒踏

殺天下人。汝勿速説此法、病在汝身也（巻三・二十二張）

慧能が南嶽を認め、南嶽や馬祖が活躍するという般若多羅の予言を伝える。また、『景德伝灯録』巻五においては、二人の問答の後に、南嶽が豁然として契会したことを付記する⁽⁵⁾。このことは時代を経るごとに、慧能と南嶽の結びつきが強くなっていることを物語るものであろう。

また、南嶽と馬祖との関係においても、『祖堂集』巻三は二人の問答の後に南嶽の偈を示すのみであるが、『天聖広灯録』巻八は問答の後に「（馬）祖問斯示誨、豁然開悟⁽⁶⁾」と記して、馬祖が開悟したことを伝える。さらに南嶽の伝法偈の後に、「（馬）祖既蒙開悟。侍奉十秋、日益玄奥」⁽⁷⁾として、馬祖が南嶽に深く師事したことを伝える。したがって、『祖堂集』巻三よりも『天聖広灯録』巻八が二人の関係をより一層強く伝えるものといえよう。

南嶽頭彰運動

南嶽の碑銘である「衡州般若寺観音大師碑銘并序」（『全唐文』巻六一九、以下「南嶽碑銘」と略す）は馬祖の弟子である章敬懷暉と興善惟寛の依頼によって張正甫が撰述した。この「南嶽碑銘」が撰される以前に、鷲湖大義・章敬懷暉・興善惟寛といった馬祖門下が相次いで中央に進出した。とりわけ章敬懷暉と興善惟寛については、二人の碑銘も入内した事を

伝える。さらに『宋高僧伝』巻九の南嶽懷讓伝においても、

元和中、寛、暉至京師、揚其本宗、法門大啓、伝百千灯。京夏法宝鴻結於斯為盛⁷

とあり、章敬懷暉と興善惟寛の二人が入内し、その教えを宣揚して大いに活躍したことを伝えるのである。

また元和十一年に慧能に大鑑禪師靈照之塔の勅諡があり、馬祖も元和年中に憲宗によって大寂禪師と諡され、塔号を大莊嚴と賜っている。これらに加え、この時期に先に指摘した馬祖門下の入内や「南嶽碑銘」が撰述されたのであり、この元和年間（八〇六―八二〇）は、慧能―南嶽―馬祖の法系を確認する活動がにわかに活発になったといえる。

これらに先立って、貞元七年（七九一）に権徳輿によって「洪州開元寺石門道一禪師并序」（『唐文粹』巻六十四、『全唐文』巻五〇二）という馬祖の碑銘が撰述され、この中で、

後聞衡岳有讓禪師者、伝教於曹溪六祖、真心超詣是謂頓門、跋履造詣一言懸解。

と伝えるように、慧能―南嶽―馬祖の三代の嗣法を記す。また、権徳輿は章敬懷暉の碑銘も撰述しており、彼が曹溪三代の顕彰運動に関わったことが知られる。

『宝林伝』や「南嶽碑銘」が撰述された頃は、荷沢神会による北宗排撃も過ぎ、慧能を祖とする南宗正系の流れがほぼ確立した時期である。柳宗元が撰した「曹溪第六祖賜諡大鑑

禪師碑」（『全唐文』巻五八七）に、「凡言禪、皆本曹溪」とあるのが、その一例といえよう。さらに「南嶽碑銘」が章敬懷暉と興善惟寛の依頼によって撰述されたことを考え合わせると、馬祖の碑銘や入内した馬祖の弟子たちの宣揚によって南嶽の名が広められたといえる。そして南嶽が馬祖の師であり、六祖慧能の正系の流れを汲むものであるとして、慧能―南嶽―馬祖の三代の法脈が示されたといえるであろう。

また、敦煌本『六祖壇經』は慧能の十大弟子に南嶽を含まず、圭峰宗密の『中華伝心地禪門師資承襲図』は、

讓即曹溪門下傍出之派徒、曹溪此類數可千余。是荷沢之同學。但自率身修行、本不開法⁸

と伝えて、南嶽を曹溪門下としながらも傍系と見ている。また宗密の言うように南嶽が開法しなかったのであれば、南嶽は馬祖の碑銘や馬祖の弟子たちによる顕彰によって世に知られたともいえよう。

小結

以上、『宝林伝』の逸文は南嶽の老安参問における大悟を伝え、南嶽の名も馬祖の碑銘や馬祖の弟子たちの顕彰によって世に知られたことを踏まえると、曹溪三代の嗣法関係は後代からの要請といえる。さらに諸資料における南嶽に関する記述は、南嶽を顕彰して慧能と馬祖を繋げようとする作為的

な要素が含まれている。したがって南嶽の伝記も作爲的になり、南嶽の実在性を疑うことも可能である。

今回の論考では南嶽懷讓の衡嶽における消息、及び青原行思や石頭希遷との関係を精査する事が出来なかった。また受具の師である弘景との関係、『宗鏡録』における南嶽と馬祖の示衆の重複という問題等もある。このように南嶽について残された課題は多いが、それらは今後の課題とする。

（キーワード） 南嶽懷讓 馬祖道一 南嶽碑銘 初期禪宗

（花園大学大学院）

- 1 宇井伯寿『禪宗史研究』（岩波書店、一九三五年）。柳田聖山「馬祖禪の諸問題」（『印度学仏教学研究』第十七卷第一号、一九六八年）等。中川孝「南嶽懷讓禪師とその思想」（『東北薬科大学紀要』九号、一九六二年）
- 2 椎名宏雄『宝林伝』逸文の研究（『駒沢大学仏教学部論集』第十一号、一九八〇年十一月）、同『宝林伝』卷九卷十の逸文（『駒大宗学研究』二十二号、一九八〇年）
- 3 柳田聖山『初期禪宗史書の研究』（法蔵館、一九六七年）
- 4 『祖堂集』の底本には、海印寺版の影印（『祖堂集』禅文化研究所、一九九四年）を用いた。以下、引用には巻数と張数を記す。
- 5 『景德伝灯録』の底本には、福州東禅寺版の影印（基本典籍叢刊『景德伝灯録』禅文化研究所、一九九〇年）を用いた。またこの箇所引用は『景德伝灯録』卷五・十三張である。
- 6 『統蔵経』一三五・六五一上
- 7 『大正蔵』五十・七六一中
- 8 『統蔵経』一一〇・八六八上

126. The *Shikaku* (始覺) Idea in Medieval Tendai Doctrine

Kōjun MOMOO

This paper concerns the *hongaku* idea of medieval Japanese Tendai. A main problem is the meaning in which the word *shikaku* is being used. I first consider the meaning of the term in the *Dacheng qixin lun*. Then, I examine its use in a number of texts associated with *hongaku* thought. I conclude that the term is used in a variety of senses.

127. A Consideration of the Missing Section of Genshin's *Bodaishin-gi-yōmon*: Based on the Insei era manuscript owned by Kōsan-ji

Masazumi KOYAMA

For a long time, Genshin's *Bodaishin-gi-yōmon* 菩提心義要文 was thought to be no longer extant. However, in 1968, Satō Tetsuei 佐藤哲英 discovered a manuscript and introduced it to academic circles. This manuscript is thought to be from the end of the Heian era or the Kamakura era. However, because this manuscript lacked its beginning, the complete contents could not be known. In examining whether or not another copy of the *Bodaishin-gi-yōmon* existed someplace else, I learned that there was a copy in Kōsan-ji 高山寺. This research considers the missing section based on the manuscript owned by Kōsan-ji.

128. A Study of the Chinese Chan Master Nanyue Huairang (677-744)

Yoshiki MATSUBARA

There are three well known accounts of the Chinese Zen Master Nanyue Huairang (Jp. Nangaku Ejō): 1) he is the Dharma heir of the sixth Chinese patriarch Huineng; 2) he is considered by later generations to be an important figure as the teacher of monk Mazu Daoyi (Jp. Baso Dōitsu; 707-788); 3) according to the historical account *Baolin zhuan* (Jp. *Hōrin-den*; 801), he achieved his enlightenment under the instruction of the Master Laoan (Jp.

Rōan; ?582-709?). This slight contradiction poses important questions about Nanyue's position in the Dharma lineage.

Nanyue's memorial epitaph was made at the request of disciples of Mazu. The implication of this event reveals an intentional distortion created by linking the two masters' Dharma lineages, Huineng and Mazu. In fact, there is almost no historical evidence that can clearly show the successive transmission of the three masters in their Dharma lineage. From this point of view, it is possible to argue that their genealogy was created in response to the needs of the related Chan circle. Simultaneously, this argument even raises doubts about Nanyue's historical existence itself.

129. An Evaluation of Juefan Huihong: quotations from his books found in the *Rentian yanmu*

Kōdai KOBAYAKAWA

Juefan Huihong (覺範慧洪 1071-1128) who was a Chan priest in the lineage of Linji-zong Huang long-pai (臨濟宗黃龍派) during the Beisong dynasty (北宋) wrote many books in his life. His works, the *Linjian lu* 林間錄, the *Chanlin Sengbao zhuan* 禪林僧寶伝, etc., convey valuable records. Although his works were criticized as exaggerated and highly speculative by Dahui Zonggao (大慧宗杲, 1089-1163), it is found that some of his descriptions were frequently quoted by other Chan priests in their works. These quotations were adopted as very important records, especially in the late twelfth century *Rentian yanmu* (人天眼目) of Huiyan Zhizhao (晦巖智昭). This report attempts to consider the estimation of Huihong, focusing on quotations from his books found in the *Rentian yanmu*. Most of the quotations from his work were descriptions about the Caodong-zong (曹洞宗), and descriptions that cannot be found in others' works were included. From this, it seems that the book the *Rentian yanmu* is an important record quoting Huihong's works. In conclusion, we can give an estimation of Huihong because his works provide a valuable record of the Caodong-zong.